〔論文〕

イエスの友会と賀川豊彦による神の国運動（2）

――「神の国」と神の国運動――

黒　川　知　文

〈目　次〉

はじめに
1．内村鑑三の「神の国」理解
2．金澤常雄による神の国運動批判
3．石原兵永による神の国運動批判
4．矢内原忠雄の「神の国」理解
5．賀川豊彦による神の国運動

はじめに

「神の国」とは「神の支配」すなわち「救い」を意味する．その「救い」は，個人の魂の救いと，社会の救いと解される．また，新約聖書において述べられた「神の国」は，「すでに」と「まだ」の２語が示すように，以下のように「すでに到来している神の国」と「将来，到来する神の国」の２つに分けられる．

「すでに到来している神の国」

しかし，わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら，もう**神の国**はあなたがたのところに来ているのです．　マタイ12：28

まことに，あなたがたに言います．子どものように**神の国**を受け入れる者でなければ，決してそこに入ることはできません．　マルコ10：15

「見よ，ここだ」とか，「あそこだ」とか言えるようなものではありません．見なさい．**神の国**はあなたがたのただ中にあるのです．　ルカ17：21

「将来，到来する神の国」

まず**神の国**と神の義を求めなさい．そうすれば，これらのものはすべて，それに加えて与えられます．　マタイ６：33

またイエスは彼らに言われた．「まことに，あなたがたに言います．ここに立っている人たちの中には，**神の国**が力をもって到来しているのを見るまで，決して死を味わわない人たちがいます．」　マルコ９：１

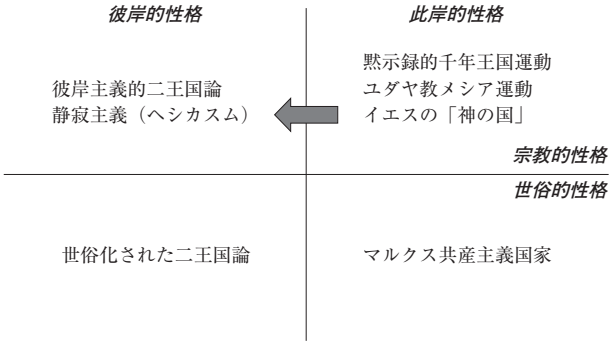
「まことに，あなたがたに言います．**神の国**で新しく飲むその日まで，わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは，もはや決してありません．」

マルコ14：25

パリサイ人たちが，**神の国**はいつ来るのかと尋ねたとき，イエスは彼らに答えられた．「**神の国**は，目に見える形で来るものではありません．」

マルコ17：20

歴史における民衆運動を，彼岸的性格と此岸的性格，宗教的性格と世俗的性格の座標軸で位置付けると以下のようになる．この座標軸において，イエスの「神の国」は固定されず，この世においてイエスの到来によって開始され，彼岸において完成する時間的広がりのあるものと考えられる．



イエスの神の国の位置付け　「すでに」「まだ」

賀川豊彦の生きた同時代のキリスト教指導者たちにおいて「神の国」はどのように理解され，神の国運動はどのように評価されたのであろうか．無教会の指導者たちの見解をみる．

1．内村鑑三による神の国運動批判

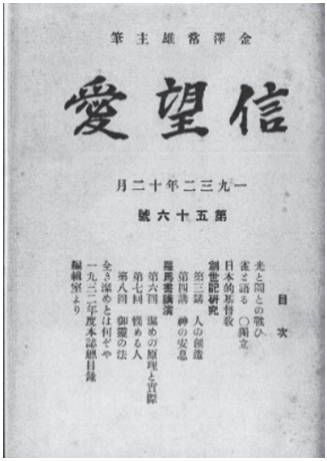
内村鑑三（1861-1930年）は，神の国運動がすでに賀川個人によって実施されている1929年において，「神の国」について以下のように論じている．

> 神の国は読んで字の通り神の国であって，神が建設し給ふ者である．人は之を建設する能はず，人が神に代つて建設して之を神に献げまつる者でない．聖書は明かに此事を示す．聖書は一度も神は聖国の建設を人に委ね給へりと記いていない．…神の国は彼の聖意が完全に行はるる所である．此世が此儘にて如此き所と

成り得やう筈がない．罪が完全に除かれ，万物に改造が施されて，此世が化して神の国と成るのである．茲に最後の大奇跡の行はるる必要がある．人の努力は如何に大なるも聖書に所謂**万物の復興**を行ふに足りない，そして是れなくして神の国は臨まないのである．如此くにして神の国は天より顕はるべき者であって地より起るべき者でない．（黙示録21章１，２節）[(1)]

「神の国」は人によって建設されるものではない，人に罪が完全になくなり，万物が復興されるときに「神の国」が実現する，「神の国」は神によって実現する，と内村は考えた．社会の救いを希求した賀川豊彦の神の国運動とは明らかに異なる見解であることがわかる．

２．金澤常雄による神の国運動批判



金澤常雄主筆

信望愛

一九三二年十二月

第五十六號

目次

光と闇との戰ひ
蓋し語る（閑立）
日本的基督教
創世記研究
第三講　人の創造
第四講　神の安息
羅馬書講演
第六回　救ひの原理と其限
第七回　慣める人
第八回　御聖の法
全き深めとは何ぞや
一九三二年度本誌題目錄
編輯室より

金澤常雄（1892-1958年）は，群馬県甘楽郡高瀬村に生まれ，日本組合教会甘楽教会で洗礼を受けた．第一高等学校に入学して内村鑑三聖書研究会に出席し柏会に属した．1918年に東京帝国大学法科を卒業し，内務省官僚となり神奈川県庁に赴任するが1919年に官僚を辞して，北海道の家庭学校で働く．その時に回心を経験した．1920年に上京して翌年には日本組合教会桐生教会牧師，1922年から札幌独立教会牧師になった．1927年に東京に戻り翌年から祖師谷で

独立伝道を開始して伝道雑誌『信望愛』を刊行した.[(2)]

『信望愛』において，すでに神の国運動が終焉した４年後に，金澤常雄は以下のように神の国運動を批判する.

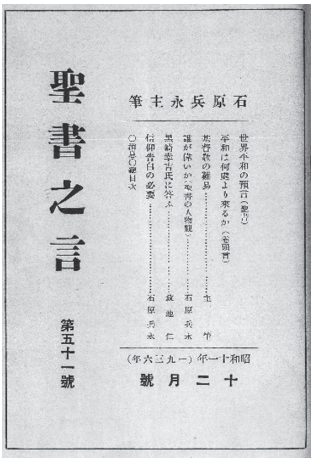
> 神の業か人間の業か：視よ，多くの教会が世を救はんとして伝道計画をなし資金を募集する．…信仰ではなくて事業ではないか．伝ふる所によれば賀川豊彦氏は昨冬北米ニューヨークに於いて次の如き主旨の演説をなしたとの事である．…神の国運動の第三期の計画とよ！之は全く人間の知恵と計画による伝道ではないか．…私は賀川氏に於て現代日本の基督教会の最も憂うべき痼疾を見る．それは伝道が専ら神の聖なる御業なるを忘れて之を人間の計画運動となし，殊にアメリカの金に頼りて日本の伝道をなさんとする依頼心之である．…実に救は神の御業である.[(3)]

救いは神の御業であるのに，神の国運動は，第一に「人間の知恵と計画による伝道」になっている，第二に，「アメリカの金に頼りて」日本の伝道をしている，この２点が金澤の神の国運動批判の内容である.「アメリカの金に頼りて」は確かにJ. Rモットーにより世界宣教会議からの多額の資金援助があったので事実である.

３．石原兵永による神の国運動批判

無会運動指導者の二人目として，石原兵永（1895-1984年）とりあげる．石原は栃木県河内郡篠井村の農家の六男として生まれた．青山師範予科に入学して内村鑑三聖書研究会に出席し，青山学院英文科を卒業して教員になった．26歳の時に信仰を持ち，34歳から内村の助手として『聖書之研究』編集に従事した．内村の死後に独立伝道者となり，東京市荻窪の自宅で石原聖書研究会を開いた．1932年以降，『聖書之言』を刊行したが，非戦論の内容のために1944年６月に廃刊を強いられた.『聖書之言』の内容を分析する.

賀川豊彦による神の国運動は，超教派運動として1930年に開始され1932年


聖書之言

第五十一號

石原兵永主筆

世界平和の預言（聖書）
平和は何處より來るか（全同書）
基督教の難易……九　竹
運命が偉いか「聖書」の人物觀……石原兵永
異端邪宗に就て……良地仁
信仰者自の必要……石原兵永
○雜感○編輯室

昭和十一年（一九三六年）
十二月號

に終わるが，その後も２年間の延長が決議される．しかし，満州事変以後の非常事体制の圧力のもとに教育伝道になり終焉していった．石原は，東亜共栄圏を「神の国」と考えるが，賀川豊彦の「神の国」とは異なると論じる．石原は，「神の国」は霊的なものであるとする立場から，賀川による神の国運動を，以下のように批判した．

> 神の国とその建設：世に所謂神の国運動なるものがあるが，単に社会を基督教化せんとする運動をそのまま神の国の建設と同一視するは勿論大なる誤りである．…神の国は，人の霊魂の中に行はれる神の直接の御支配である．[(4)]

石原にとり「神の国」は，人間の努力ではなくて，「罪の赦しと信仰，神はこの原則によつて我らの中に神の国を立て給ふのである[(5)]」とあるように，神が実現するものである．

４．矢内原忠雄による「神の国」

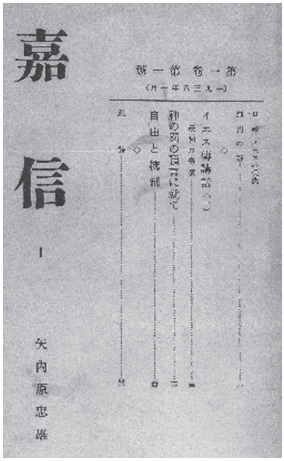
矢内原忠雄（1893-1961年）は愛媛に生れ，東京帝国大学法科を卒業して1920年から東京帝国大学経済学部助教授になった．1937年12月４日に国家の軍国主義下を非難する言動により退職を余儀なくされた．戦争が終わるまでは個人信仰雑誌である『通信』『嘉信』『嘉信会報』を発行して福音を伝えた．

『通信』は1932年に創刊され，『嘉信』は1938年１月より『通信』に代わり刊行された．だが『嘉信』は，1944年12月に警視庁により廃刊を命じられた

ので，1945年２月に終刊のかたちをとった[6]．

「嘉信」とは良きおとずれ，すなわち福音のことである．

矢内原には神の国運動に関する批判文はないが，「神の国」についての理解が，矢内原事件の発端となった講演の記録に表れている．藤井武第７周年記念講演会における「神の国」と題する講演は以下の内容であった．


嘉信

第一卷　第一號

（一九三五年一月）

イエスの友會

矢内原忠雄

神の国―速記―：基督教の権威と共に，日本国の理想は滅びんとして居ります．否，滅びました．…併し，日本の，日本人のこの国家思想，この国家観念，之が神の国の真理に役立つ為にはただ一つの条件がいります．それは悔改，心の向け處を変へてキリストの福音を信ずるといふ事が，之が条件．…かかる永遠の神を畏み恐れ，かかる絶対的神を信じ，その上に国家を，国家思想，国家観念を立てて行かなければならない．47・３今日の時局に対して私の言ふ處は簡単です．支那の国民よ，早く武器を棄てて降参しなさい．…若し支那に一人のエレミヤがあるならば，日本に抵抗することを止めて出でて降れ，之が本当に支那を救ふ道だ．…日本の国民に向つて言ふ言葉がある．汝等は速に戦を止めよ！　さう言ひますけれども，戦を止めません…基督教徒は戦ふ者の双方の間に立ちまして，十字架の旗を持って立つのであります．

…今日は，虚偽の世に於て，我々のかくも愛したる日本の国の理想，或は理想を失つたる日本の葬の席であります．私は怒ることも怒れません．泣くことも泣けません．どうぞ皆さん，若し私の申したことが御解りになつたならば，日本の理想を生かす為に，一先づ此の国を葬つてください．[7]

理想的な日本国は，「神の国」の上に築かれる．「神の国」とは，罪を悔い改めて，心を変え，キリストの福音を信じ，神を恐れる国民かな成る国である，と矢内原は論じている．矢内原にとって「神の国」とは，魂の救いを得た個人からなる集合体であると考えられる．

5．賀川豊彦による神の国運動

賀川による「神の国」は，決して抽象的な概念ではなく，彼岸的な国でもない．此岸において，現実に目に見える形で建設されていく国であった．無教会指導者たちとは本質的に異なる地上の国である．

賀川によれば，神の国運動の目標は，①伝道―霊的生活を深めるため，②教育―より一層の平信徒指導者のための教育を含むキリスト教教育，③組織―または職域伝道，キリスト教経済倫理の応用にあるとしている．[8] 個人の魂の救いだけでなく教育と組織をも求めていて，社会全体の救いが神の国運動の目標であることが分かる．

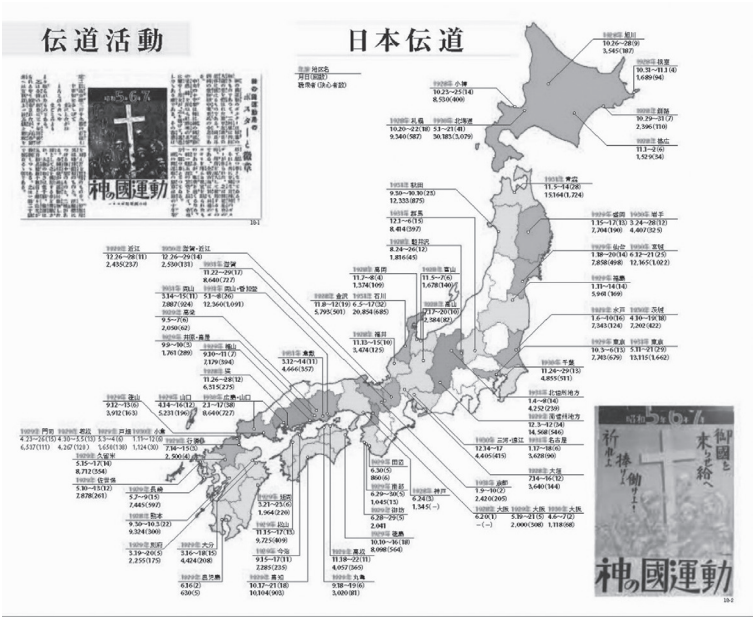
さらに神の国運動について，賀川は以下のように述べている．

神の国運動は意識運動である．それは聖

霊の覚醒による．唯物史観や，資本主義的軍事施設や，史的唯物弁証法によって構築されるものではない．神の国は人類の霊性に天父の霊がのぞまなければ絶対に組織できるものではない．良心の罪を洗いきよめ，曲れる道より悔改めしめ，十字架の血によって，人の弱きを担い得る贖罪意識が万人の意識として生まれ出ずるまで，社会民主も，産業民主も結実するものではない．それは経済立国でもなければ，また専門政治でもない．それは神の子の世界政治の出現である．犯罪もなければ，原子爆弾も必要のない社会組織である．それは発明と発見と，教育と博愛と，社会保障と，下座奉仕が競争的に行なわれる世界である．それは建設であり，創造的であり，再創造的でなければならぬ．[(9)]

罪を悔い改めてイエスの十字架を信じることが「万人の意識」となる．これは矢内原忠雄の「神の国」に類似している．ただし，賀川の場合，そのような「神の国」は，具体的には社会民主や産業民主が結実し，犯罪もなく原子爆弾も必要なく，発明と発見，教育と博愛，下座奉仕が行われる再創造の国である．現在の社会が大きく変わり，良き方向へ改革されたのが賀川の「神の国」である．そこに，矢内原の「神の国」との違いがあると考えられる．

賀川はこのような「神の国」を神の国運動によって，地上に実現しようとしたのである．賀川による神の国運動は，日本全国において行われ，『神の国新聞』が発刊され，「御国を来らせ給へ　働けよ，捧げよ，祈れよ」の文句のあるチラシが配布された．（図を参照）



出典：賀川豊彦記念松沢資料館の展示物

〔注〕

（1） 内村鑑三「神の国の建設に就て」昭和４（1929）年12月10日『聖書之研究』353号.

（2） 『信望愛』は1944年６月の266号で一時廃刊になり戦後1947年１月に復刊した．同雑誌は，1958年３月に死去するまで継続された.

（3） 『信望愛』94（1936年２月）巻頭

（4） 『聖書之言』，第80号（1939年５月）２－３頁.

（5） 同，６頁.

（6） しかし矢内原は，翌３月からは『嘉信会報』を発行し，同年９月号を『嘉信』８巻９号として継続し，矢内原が死去した翌月1962年１月に『嘉信』は24巻288号で終刊した．『嘉信』は，戦争末期には物資不足のために印刷紙の質が悪くなり，1945年４月12日の東京空襲のために印刷所が焼失し，以後終戦までは矢内原によるガリ版印刷によって刊行された.

（7） 『通信』47（1937年10月）４頁.

（8） 『賀川豊彦全集　24』388-389頁.

（9） 同，507頁.